

労働経済学

——理論と実証——

B.M. フライシャー著 津田真澄 訳

総合労働研究所

労働経済学

LABOR ECONOMICS
Theory and Evidence

B. M. フライシャー 著
津田真澄 訳

私は、調査報告、単行書によって経済理論を現実世界に関連づけようとした多くの学者に最大の感謝を捧げる。それらの文献は本書の大部分の基礎をなしている。また、出版社が契約した4名の検討者 reviewers のコメントから多大の利益をえた。すなわち、W・リー・ハンセン W. Lee Hansen はすべての原稿に目を通し、各部分について詳細なコメントを与えてくれた。彼の批判によって本書の内容、表現、説明に関して非常に多くの改善ができた。スチュアート・アルトマン Stuart Altman も全文を通読したが、本書の全体の構想と範囲についての彼のコメントは有益であった。バートン・A・ワイズブロード Burton A. Weisbrod とユージン・L・ローレン Eugene L. Loren は種々の章について有益なコメントをくれた。さらに、オハイオ州立大学の若干の学生諸君が、原稿の全部または一部を読んで本書を改善する大きな援助を与えてくれた。これらの学生たちはカール・エッジ Karl Egge, スレイン・エガートソン Thrainn Eggertsson, ジャック・パーダム Jack Purdum である。また本書の一部は私の大学の労働経済学研究会での報告および大学の同僚のコメントから利益を受けている。

私の助手であるトマス・ニースナー Thomas Kniesner とジョージ・カイツァ George Kaitsa は本書の文章上の不正確さと形式上の矛盾を調べてくれた。多くが発見されたので、もう誤りは少ないと思う。

原稿のタイピングはカンディ・ベル夫人 Mrs. Kandy Bell とアリス・エッジ夫人 Mrs. Alice Egge をわずらわせたが、私のなぐり書きを多少なりとも見られる形にしあげてくれた労苦に感謝したい。

目 次

序 論

第1編 労働供給——理論と実証

第1章 労働経済学への序言	3
1 科学としての労働経済学	3
2 生産の1要素としての労働	6
3 人材資源としての労働	9
4 所得の源泉としての労働	10
5 労働の世界——説明されるべき動き	11
第1章への付論	
1 データ源とデータの解釈	13
2 経済データの利用	32
第2章 労働供給理論：短期における家庭構成員	45
1 効用関数	46
2 消費機会：予算制約	49
3 効用極大化——労働時間の決定	50
4 供給労働量	53

5	もう1つの方法	59
6	全家族構成員の労働供給	62
7	長期の労働供給	63
第3章	労働供給理論の実証	64
1	はじめに	64
2	労働時間	67
3	労働力化	82
4	結 論	101
第4章	労働供給理論：長期における家庭構成員	103
1	人材資本の理論	104
2	人 口	115
第5章	職業、企業、経済全体への競争的労働供給の理論	118
1	職業別総供給	118
2	企 業	125
3	産 業	127
4	経済全体	128
5	労働供給理論の一層の応用	129

第2編 労働需要——理論と実証

第6章	労働需要の理論：競争企業	133
1	企業の生産関数（幾何分析）	133
2	諸要素のアベイラビリティ	136
3	需要曲線の誘導：短期	136
4	需要曲線の誘導：長期	142
第7章	労働需要の理論：競争産業	153

第8章	労働需要の実証	158
1	はじめに	158
2	需要理論の1つの検証	163

第3編 需要・供給の相互作用——理論と実証

第9章	競争的労働市場における需要・供給の相互作用	173
1	市 場	173
2	均 衡	174
3	経済的福祉	176
第10章	競争を妨げる条件下での労働市場	178
1	生産物市場における競争の阻害	178
2	需要独占	179
3	要素市場における供給独占	180
4	不完全な知識と利潤の非極大化	184
5	競争理論の関連性	186
第11章	労働組合の経済学(1)	188
1	はじめに	188
2	労働組合の諸目標	189
第12章	労働組合の経済学(2)	202
1	はじめに	202
2	労働組合の賃金に対する効果の諸概念	203
第13章	実質賃金率と賃金構造	214
1	はじめに	214
2	アメリカにおける実質賃金率の歴史的推移	215
3	賃金構造	225

4 結 論	256
第14章 貨幣賃金率の水準	259
1 はじめに	259
2 賃金水準の伝統理論	261
3 賃金調整, 雇用調整, 賃金水準の理論	264
4 賃金調整の理論を支持する実証	278
5 その理論の意味	281
第15章 失 業	283
1 はじめに	283
2 失業の多様性とその原因	288
3 結 論	315
訳者あとがき	319
参 考 文 献	322
索 引	332

訳者あとがき

本書は Belton M. Fleisher, *Labor Economics: Theory and Evidence*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey. ix+304 pp. 1970 の全訳である。著者ベルトン・マンデル・フライシャー教授は1935年5月16日生まれ。1957年スタンフォード大学で経済学士をえ、同大学経済学部の大学院に進み、1961年経済学博士の学位を取得した。学位論文は「合衆国へのプエルト・リコ人移民の経済的局面」であった。1961年春までスタンフォード大学の経済学講師を勤め、1961年10月にシカゴ大学経済学部助教授に転じた。さらに1965年10月にオハイオ州立大学経済学部助教授となり、1966年10月に準教授 associate professor に昇任、1969年10月に同大学正教授となった。1973年11月現在までに発表された著書、論文は以下の通りである。

〈著書〉

1. *The Economics of Delinquency*, Chicago: Quadrangle Books, Inc., April, 1966.
2. *Labor Economics: Theory and Evidence*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1970.

〈論文〉

1. "Some Economic Aspects of Puerto Rican migration to the United States", *Review of Economics and Statistics*, August, 1963.
2. "The Impact of Puerto Rican migration to the United States", in Mark Perlman (ed.), *Human Resources in the Urban Economy*, Baltimore: the Johns Hopkins Press, 1963.
3. "The Effect of Unemployment on Juvenile Delinquency", *Journal of Political Economy*. December, 1963.
4. "The Effect of Income on Delinquency", *American Economic Review*, March 1966.

5. "Employment and Wage Rates in Retail Trade Subsequent to the 1961 Amendment of the Fair Labor Standards Act" (with William J. Shkurti), *Southern Economic Journal*, July, 1968.
6. "The Economics of Labor Force Participation: A Review Article" *Journal of Human Resources*, Spring, 1971.
7. Asset Adjustment and Labor Supply of Older Workers (with D.O. Parsons and R.D. Porter), *Income Maintenance and Labor Supply: Econometric Studies*, ed. by G.G. Cain and H. Watts.

労働経済学については、日本でも、数年前から近代経済理論およびマルクス経済学の双方から研究書が出版されている。労働経済学 Labor Economics と正式に題した外国研究書の翻訳は他にもあるが、本格的な研究書は本書が最初のものであろう。本書刊行の意義は第1にこの点にあり、近代経済理論の研究者にもマルクス経済学の研究者にも役立つところが多い、魅力的な作品である。

本書の書評としては「エコノミカ」1972年2月号でロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのレイ・リチャードソン Ray Richardson 教授が、またコーネル大学の「インダストリアル・アンド・レイバー・リレーションズ・レビュー」第24巻、第2号(1971年1月号)にサイモン・フレイザー大学のデニス・R・マキ Dennis R. Maki 助教授が書いているものが代表的であろう。リチャードソン教授は「本書は現在の労働経済学のテキストの中で最良のものである」と賞讃しているし、マキ助教授は本書の中で第3, 14, 15章をとくにすぐれた部分として推賞している。

本書は、序論で明らかなように、新古典派経済学の立場から書かれたものであって、第14章ではとくにシカゴ学派の見地が顕著に出ている。訳者には第2, 3, 4章で展開されている労働とレジャーに関する代替効果と所得効果の論議に興味をもったことをつけくわえておきたい。

訳出にあたっての1, 2の苦心を述べておく。序文を読んだ読者が感じるように、本書の原文は難解である。著者の謝辞を読むと、本書の原稿は印刷に付されるまでに多くの人々の閲読をへたようであるが、原文には数十の誤植があり、プレントイス・ホール社から送られてきた正誤表以外に、訳者は著者に質

問することで正確を期した。また、原文そのものも難解な箇所がかなりあり、7～8行が1つの文章である場合がきわめて多く、マックス・ウェーバーの著書を読んでいるような印象をもったところもある。読者に読みやすいように工夫したので、原書よりは読みやすくなっているつもりであるが、訳出に誤りがあれば遠慮なく指摘していただきたい。改版の際に訂正したいと考える。

フライシャー教授自身から、訳者の疑問の箇所について丁寧な回答をえたのであるが、そのほかに、フライシャー教授の同僚であるオハイオ州立大学の八田達夫教授から、さらに詳細な説明をいただいた。それらは、(訳注)の中で明記してある。また説明をしておいた方が読むときに便利だと考えた術語について、訳注をつけておいたので参照してほしい。

本書は労働経済学を基礎的に、かつ体系的に研究しようとする人々には最適のものであると考える。本書によって労働経済学に関心をもつ人々が多くあらわれることを望む次第である。

刊行にあたって総合労働研究所の清水浩毅、能島健之助の両氏にお世話になった。記して謝意を述べておきたい。

津田真澄

著者略歴

BELTON MENDEL FLEISHER

1957年スタンフォード大学卒業。1961年経済学博士。1961年シカゴ大学助教授。1965年オハイオ州立大学経済学部助教授に転じ、1966年準教授、1969年より教授。

訳者略歴

津田真澄（つだますみ）1952年東京大学経済学部卒業。1970年より一橋大学教授。経済学博士。＜著書＞に「アメリカ労働組合の構造」「年功的労使関係論」「アメリカ労働運動史」などがある。

労働経済学

1974年9月25日 発行

著者 B. M. フライシャー

訳者 津田真澄

発行者 本郷富士子

発行所 総合労働研究所

東京都渋谷区代々木1-38
電話 03 (379) 2281~6
振替口座 東京58631

© in 1974 by SOGORODO KENKYUSHO

3033-380110-4211

印刷東徳・製本松栄堂